

学会の理念と役割・はたらき

大阪大学 田中和夫

テーマ

- ・ 存在感のある分野となるために
- ・ 国際化・学際化のために
- ・ 社会的理解を得るために
- ・ 人材育成

存在感のある分野になるための条件として考えられるもの、

予算に見合い、研究の進捗に見合った、情報公開がされていること。
国際化が本当の意味で実施されていること。
若手研究者の登用、抜擢が組織の中でなされ、年功序列の組織ではないこと。

こうした条件を満足するために、学会は、直接・間接に関わることが可能です。

ここに、掲げた条件は、慣性核融合の分野で、米国・フランスの国家プロジェクト NIF, LMJ, 中国のプロジェクト、FIREX計画、欧州の270 kJレーザー建設計画Hiperプロジェクトを見、またEPS, APSのプログラム委員として会合に参加することで常日頃、必要と考えているものです。

予算処置と研究の進捗にみあった情報公開
学会関係者も社会もこれを注視しています。

NIF,LMJ、中国のレーザー核融合研究の展開を見ていて、必ずしも十分な情報公開が行われているとは思いません。

相当に、これを組織だっておこなうことは、一旦プロジェクトが走り出すと、そのプロジェクト実施に時間を取られ、非常に難しくなるようです。

これが無いと、巨大な予算を使う大規模プロジェクトは、研究者の支持を得られず、社会からもそっぽを向かれるでしょう。

学会はこうした研究進捗発表の場であり、関係組織、学会関係者は、積極的にこれを利用することが可能です。

例：2006年連合講演会(富山大学)

国際化が本当の意味で実施されていること。
つまり「国際化」という言葉をもう使わなくても良い状態にすること。

プラズマ核融合学会も、国際セッションが午前中実施されるなど、国際化の動きはありますが、アジアを代表するつもりであれば、その動きはもっと加速されるべきでしょう。

研究においてもしかりです。
欧州においては、欧州連合の中で国境が取り払われ、レーザー研究は、EXCITED STATEに明らかに励起されています。

真の意味での国際協力研究とは、何かを考える時は今を於いてないでしょう。
このままでは、日本は、国際化の動きから取り残される可能性があります。

APFA (Asian Plasma and Fusion Association)は、年會に於いて日本支部大会を共催するなどが可能でしょう。特に、ITER、BAに関しては、インド、中国、韓国、日本の参加により定常化が期待できる。

若手研究者の登用、抜擢が組織の中でなされ、年功序列または、硬直した組織ではないこと。
こうしたシンポジウムに、20才、30才代の研究者がいつも出ているようにすること。

この点に関しては、プラズマ核融合学会は、核融合研究そのものの歴史が古く硬直した組織に陥る危険性を持っているかもしれません。

若手が積極的に意見を言え、年齢を超えて対等な議論ができる環境を持つことが重要です。

プログラム委員会、編集委員会、理事会などに若手の積極的な意見を反映できるように考える必要があるのではないのでしょうか。